

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak
LICENSED PRODUCT

特別
千 4
5083

8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6

名家画譜二冊之內
此為齋主

現齋本

39-7976



Red seal impression with Chinese characters, likely a collector's or publisher's mark.







明倫十五年二月九日改之

序

明倫十二年
卯二月廿日
求之



誌曰。教習窺牆。蓋嘲其無所見也。
余之於繪事。亦復然。一日友人某懷
蘇軾氏畫本。來而屬序於余。辭不敏。
因請於此中。開閱之。錄其詩古歌。倚之
言。名圖之。重之以注解。亦不意何人作也。
因笑友人曰。余亦不知繪事。如蘇軾。但嘗

世有。臨稿字之所見。亦乃一展之。乃冠
冕輿馬者。吾識其為縉紳。蒼纒紳
既也。吾識其為匹夫。山川草木鳥獸者。
吾識其為山川草木鳥獸。吾識其為
物類之名。一學之歟。而唯見庶物之細密。亦
然耳。乃學之端精神。與象外新定。
初之矣。鼓目者窺牆也。豈是贊一辭耶。
且如祖解。尚方未。のを。雖能釋然
中。皆陰也。古人之心。雖之。之者。亦
画之解。讀以粗得。曉詩歌。之者。則
此解亦。非。之。也。以。滑。お。者。
善。方。亦。解。事。友。人。曰。此。情。之。以
為。之。解。頭。事。也。遂。知。強。探。解。云。
三。明。二。年。十。三。日。宣。武。之。一。月。

平安繪巻居之録



畫苑卷之一目錄

- 一 進履橋圖オビツクハシノヅ
- 一 水面藤花圖スイメンフジハナノヅ
- 一 秋夕宮詞圖アキヨミヤノウタノヅ
- 一 湖上落花圖ミヅウキハナノヅ
- 一 晚春桃花圖マンシュントウハナノヅ
- 一 山家薺圖サンカアサギノヅ
- 一 四時景物圖ヨシトキシヨブツノヅ
- 一 官女見夜梅圖クワンニョミヨノウメノヅ
- 一 前庭夕立圖マエニワユフタツノヅ
- 一 艸菴子規圖クサアツカキノヅ
- 一 月下海鶴圖ツキノカミウヅノヅ
- 一 汐汲海人圖シホツクミウミタチノヅ
- 一 野遊賞花圖ノノユウショウハナノヅ
- 一 山寺落花圖ヤマテラノキハナノヅ

一 清瀧川山吹圖

一 採蓮曲圖

一 五節舞女圖

一 羈旅海舟圖



進履橋詩圖

博浪沙頭恨殊消
漢家四百年宗社

周衡之

斃秦蹈項不終朝
開闢洪基在此橋

詩云張良の力也韓圃の力也始皇帝は韓圃を亡せしは悖るべし
博浪といふ所は韓圃を殺す所也
高祖はは久軍師とかりて朝を改め周を秦も楚の項羽も亡し
ふぞ其より高祖乃帝師とあり漢朝四百年は天下を開き始り
万世まで其の代の名を傳へし事代の人にもはるはるの早竟出の
橋のよきも其石より一巻の兵書は授けりしゆゆぞ万歳云々
師の恩をうけりしと教ふるはあり



夜の梅

大江戸言

梅の香紙

あすの

あすの

梅の枝戸れ

あすの

あすの梅戸れをわつわ
それきくうれむら
せうも也は梅子よい
けいれいれあわの吹ぬ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ



藤美

大納言實季

水戸

あすの

あすの

あすの

あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ
あすの梅戸れをわつわ



夕立

於中納言云後

夕立すか

庭の玉簾

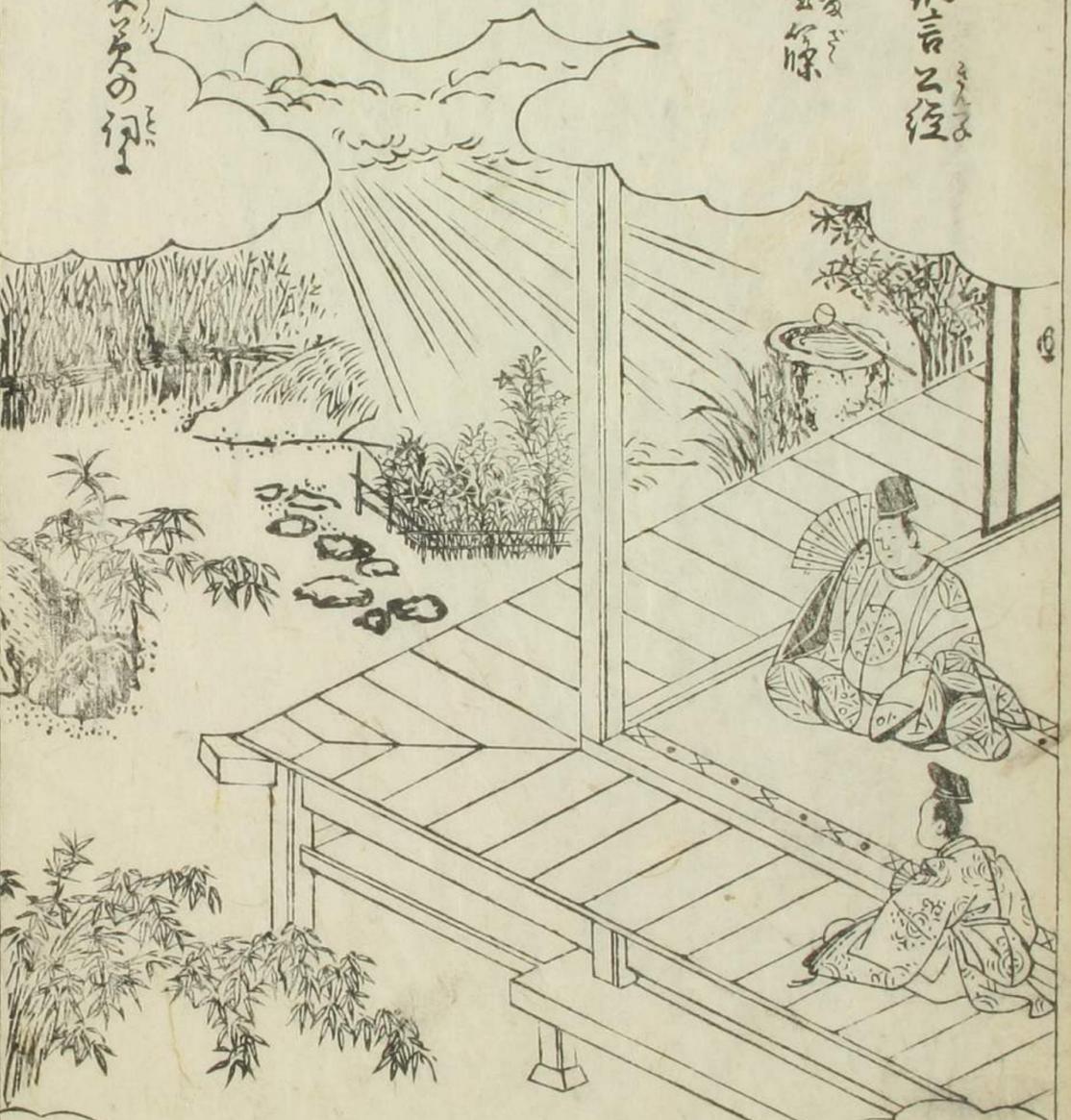
夕立すか

一村こみ

夕立すか

夕立

夕立すか
夕立すか
夕立すか
夕立すか
夕立すか
夕立すか
夕立すか
夕立すか
夕立すか
夕立すか



宮詞詩圖

杜牧之

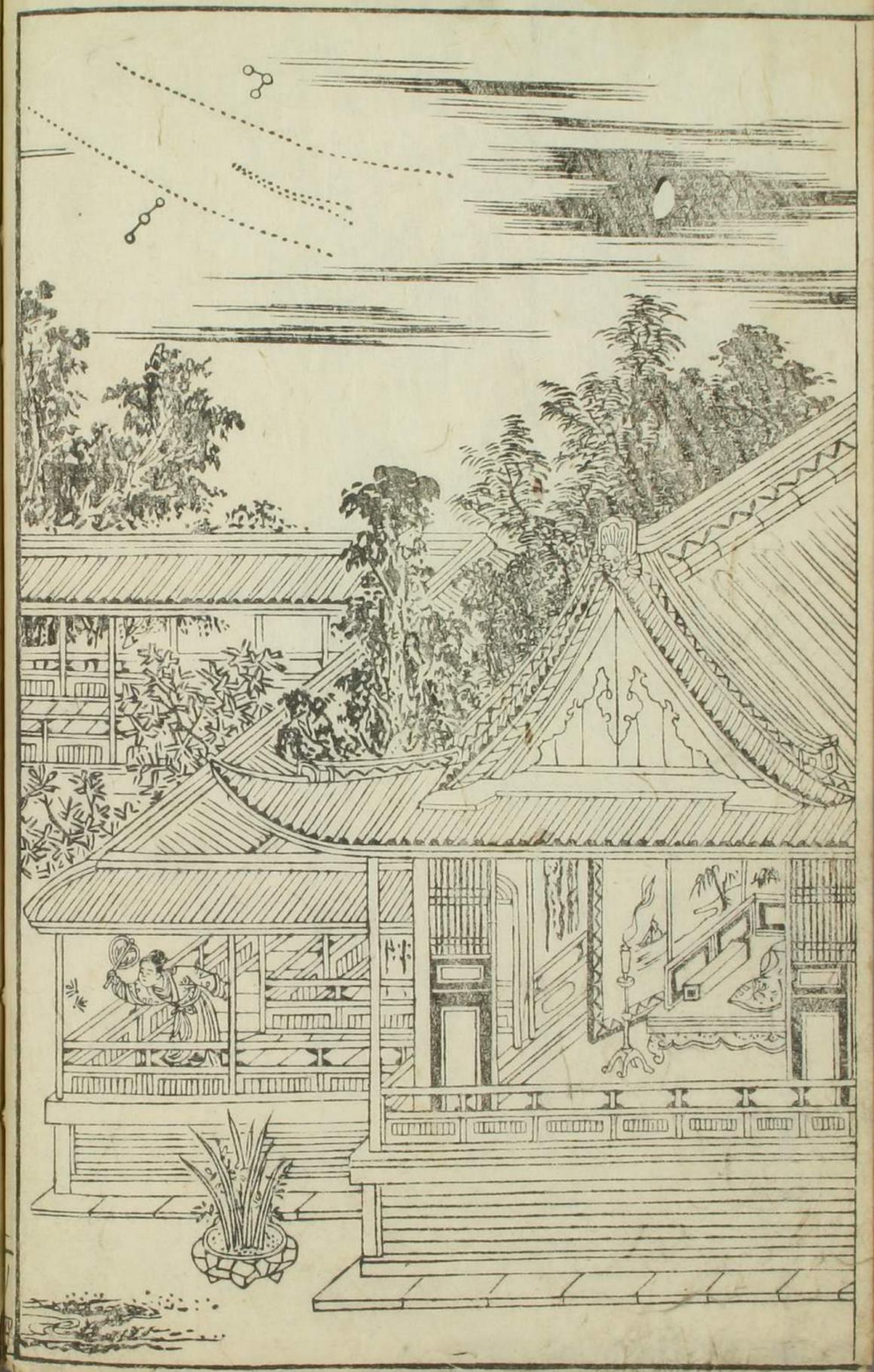
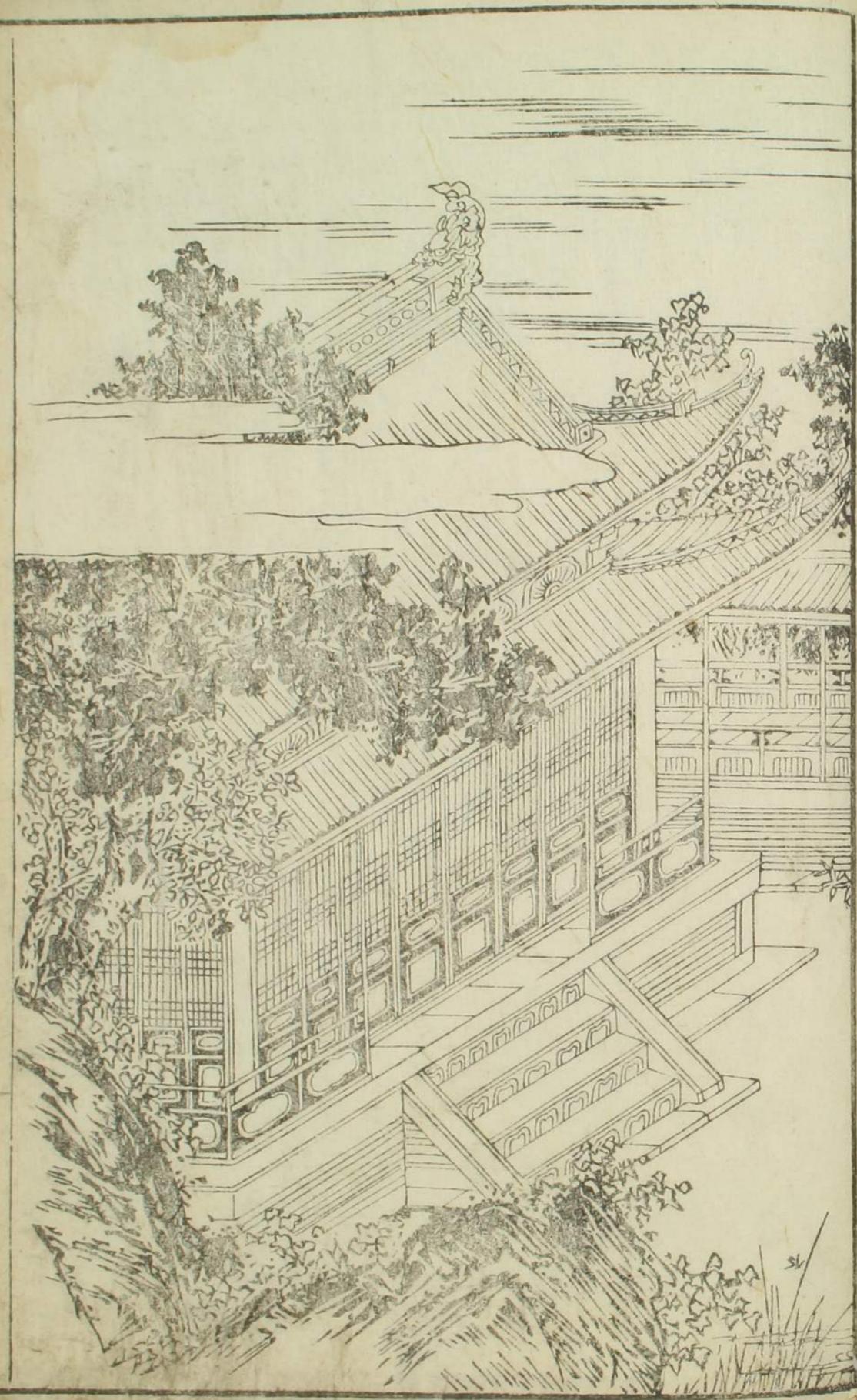
銀燭秋光冷畫屏

輕羅小扇撲流螢

玉階夜色涼如水

卧看牽牛織女星

竹衣の裏の宮女はさるに主様金殿の青髪に畫屏を引起して招摺をさしりて
独歩に秋のまらねは銀燭の火紅く秋をさへはく畫屏は映して入物冷しくあはそ
徐く露のまろ羅ほく流る園角と梧桐平山のりに立ちゆきひたれおや堂の双燕
おるらぬさあわかあれ堂中とさひらおとせおの青髪と人れは秋夜の時さらば玉
階月の秋が輝く水の中は涼いぞ玉上より二星が一年の命令をさると叫ぶにわ浦山
しほりや秋の秋手されも悲しき事さるるまのいと恨しめを園に入くと福をば
すご二星は秋をさるる形に思ひて見るは作まりさるる女のほおとを失ふを述るる



郭公

白土河原を去後成
昔より米の産に名乃御

たぐひごとく人世
しやまを

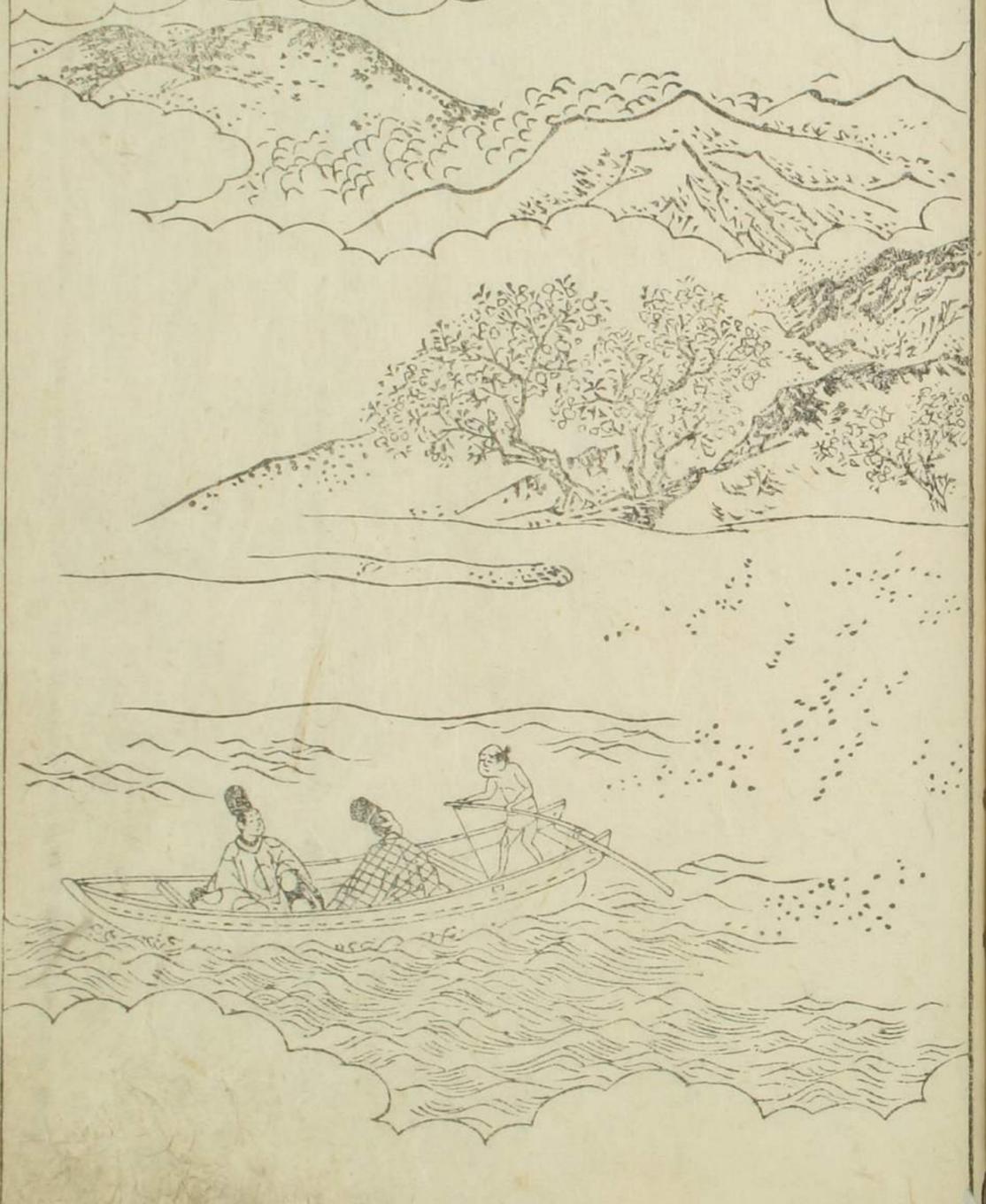
ふかむ我が世は位々有
り若中なきをいれぬもの
ゆくればなるがよき世ののれ
け米の産は位々有り
るれきんやなはれも一入もみ
まよりて感徳多しや
昔は米をいれぬものとあり
まよとふちや何ものなきを
ゆくればなるがよき世ののれ
をいれぬものとあり
人よ知つたもいれぬものと
之をいれぬものとあり

湖上之記

二月四日

花さきりては
ふかせ
うだりては
はなはな

ふかのふかたは
くしきさきり
けいさきり
とたりはなはな
この花さきり
えいさきり
ては



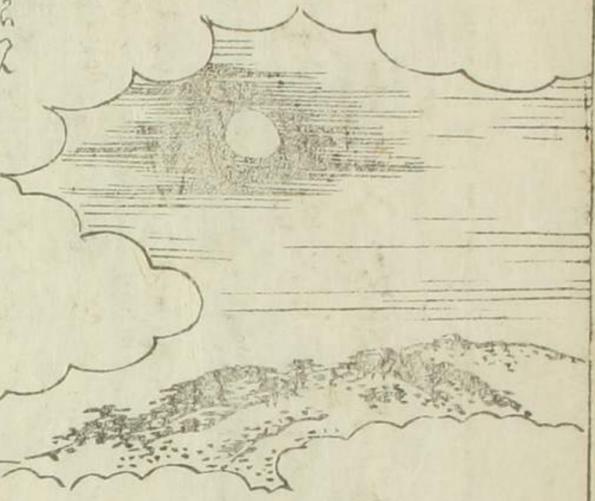
海を過月

難波

月をこぼけり

あきの

秋の心は難波の浦に海を
こぼれしとてあきの月をこぼけり
つとてこぼれし月をこぼけり
あきの月をこぼけり
あきの月をこぼけり
あきの月をこぼけり



晩春詩圖

一年春事又成空

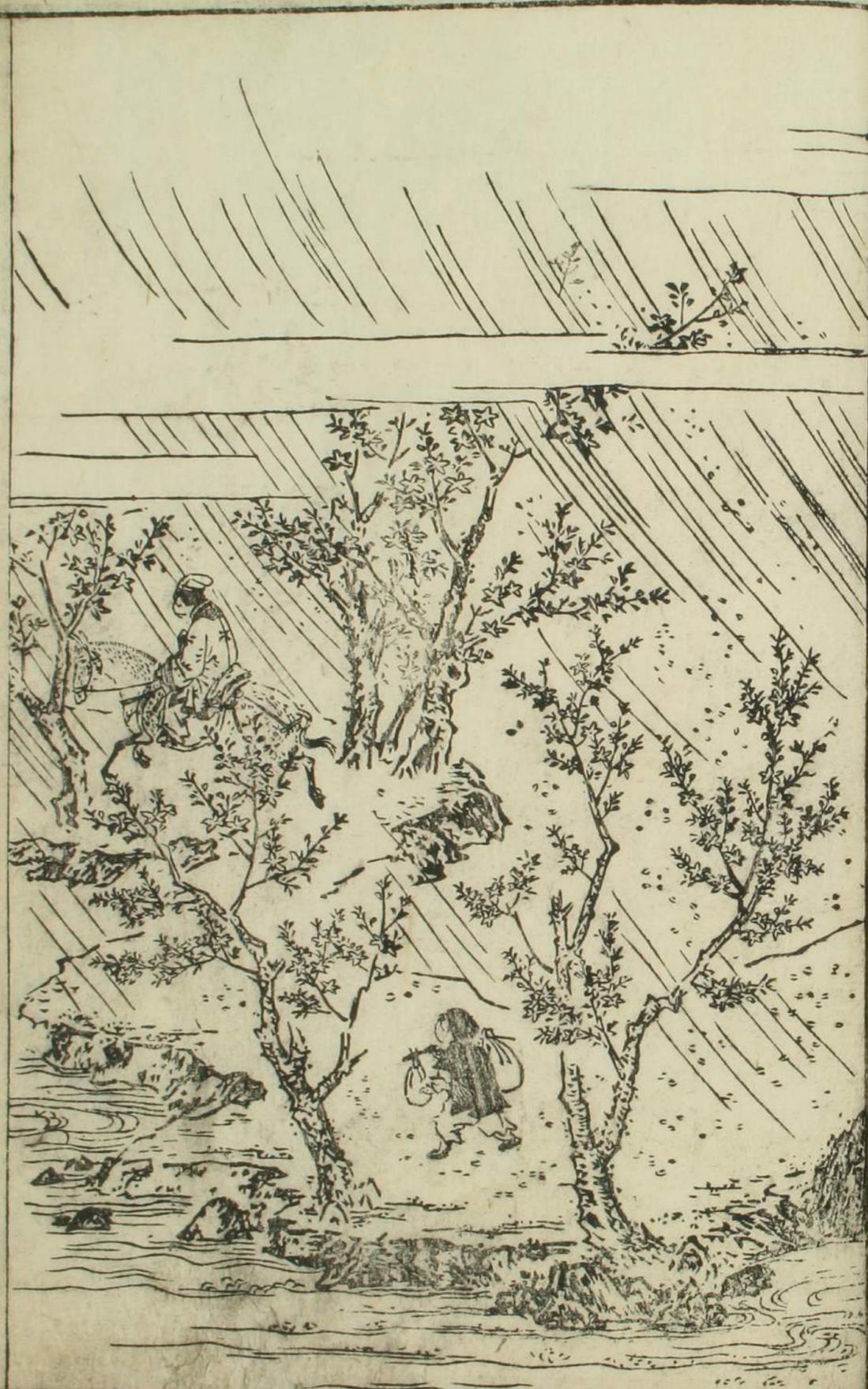
夾路桃李新過雨

張公庠

擁鼻微吟半醉中

馬蹄無處避殘紅

詩をい春も漸く少くもめでまの
名所を惜しむ酒を汲詩を吟じて
い謝書が故車也路孤真中にさ
ふ馬蹄無處避殘紅とやん
あがるいぞ嘆まらるる



芋火

貫之

難波女なみのめのなま衣ぬいのぬいて

うらやま

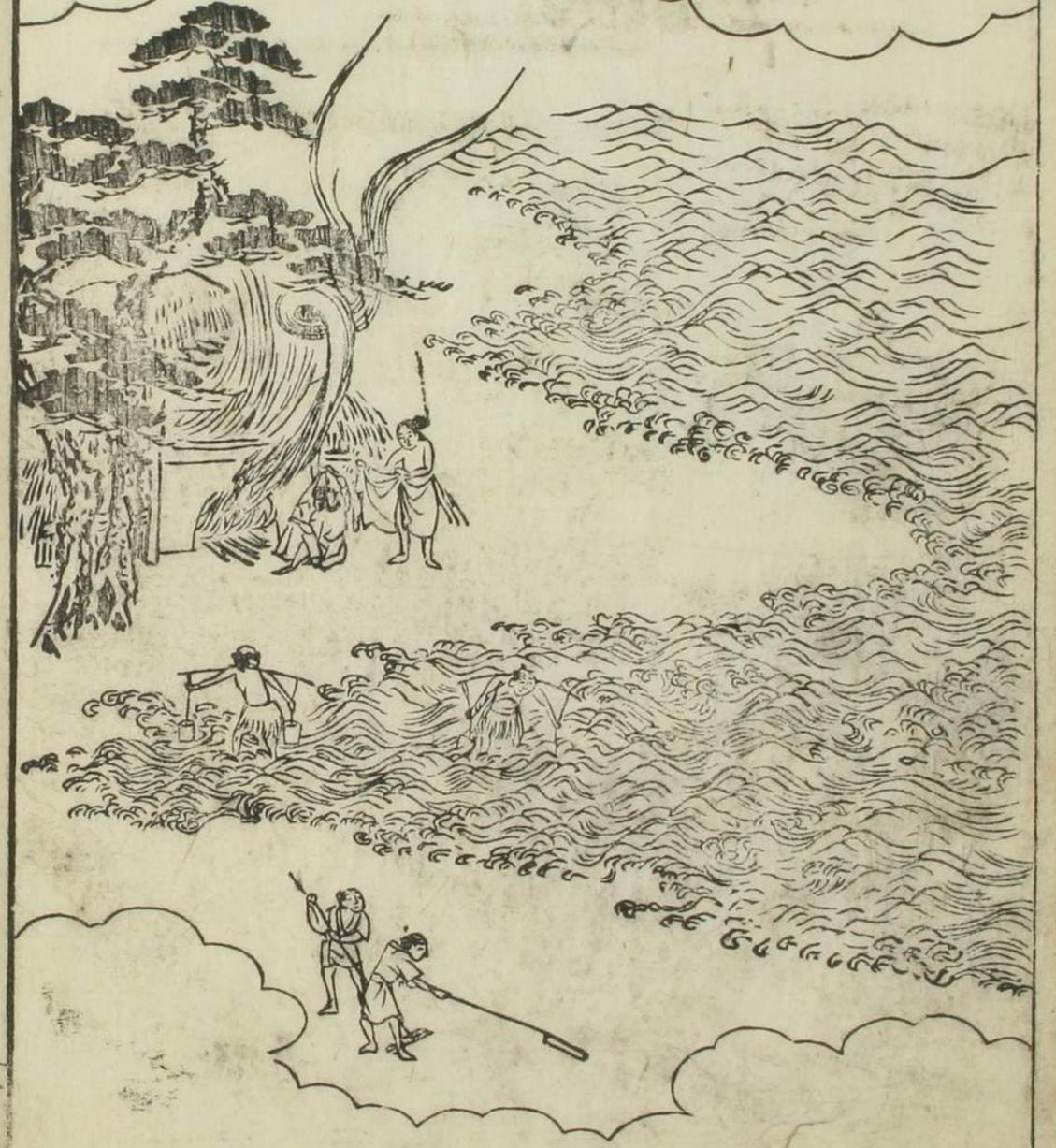
わかれ

そめ

飲のみ乃の公こう難なん波ば女にょ乃の

しやうのみ衣ぬいのぬい白しろ

ぬれてぬれ芋いも火ひををわわすす



羽衣うい

紀伊きい

とと難なん波ば女にょ乃の衣ぬい

わさざなれ

あやうあやうのの衣ぬい

身みののかかいいぬぬががいい日ひ終しま
 へへああんんををああららわわいいぬぬ衣ぬい
 乃の明あき中なかつああららわわいいぬぬ衣ぬい
 べべいいぬぬ衣ぬいををああららわわいいぬぬ



野遊

友永 彦隆 作

わらわら

うきうき

ゆきゆき

花の宿

やぶの

うきうき

春のわがやうなまはら
まはらまはらまはら
ゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆき



四時詩圖

春水満四澤
秋月揚明暉

陶淵明

夏雲多奇峰
冬嶺秀孤松

詩名春の陽氣地下より生ずるより地脈通して水せざるゆへ
四方の池澤は漫々と水満く綿の糸は深き夏は陽氣を
ほく火氣と谷より蒸升るとゆへは雨の形をわけてあやま
峯れど秋は金氣盛りて天氣も澄徹とゆへは月の輝
一不晴なり冬は干草万本お枯る色々の葉落くふれ糸を
寂さふ松の堅剛ゆて寒を凌ぎて立ち四言は四季を述べたり



山里にすむるもよきなり

落石 能因法師

山々のまればゆふれ

まつくれ

入おのろ

花ぞ教る

花の心と雲のまればなれ

おもひきき入おろく

鳴りくわくと花のちり

こころと入おの

花ぞ教る

はてふとあり

中おの

住業

らん



山吹

山中細言函信

若根

流石

子

波

山吹

の

山吹

山吹

山吹

山吹

山吹

山吹

山吹



五等舞妓

うしろのしほ

天はくが 中のあはれ

あはれ

あはれ

あはれ... 天はくが... 中のあはれ... あはれ... あはれ...



採蓮曲詩圖

李太白

若耶溪傍採蓮女

笑隔荷花共人語

日照新粧水底明

風飄香袖空中舉

岸上誰家遊冶郎

三三五五映垂楊

紫騮嘶入落花去

見此躑躅空新腸

詩云若耶溪の水に傍り舟を泛して... 採蓮女子笑顔で荷花を隔て... 紫騮嘶入落花去... 見此躑躅空新腸...



四轉旅

佐成に

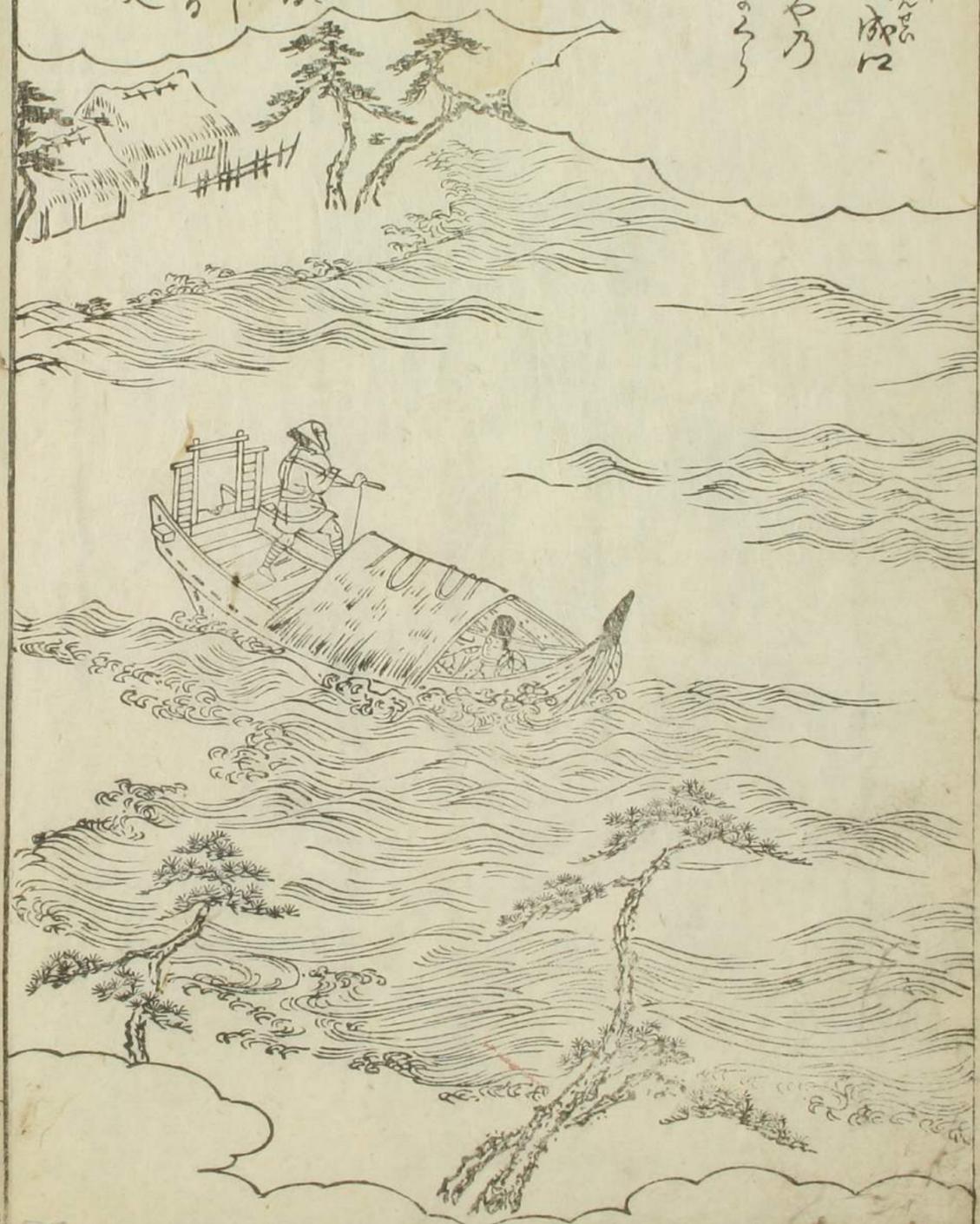
浦つゝ一破のや乃

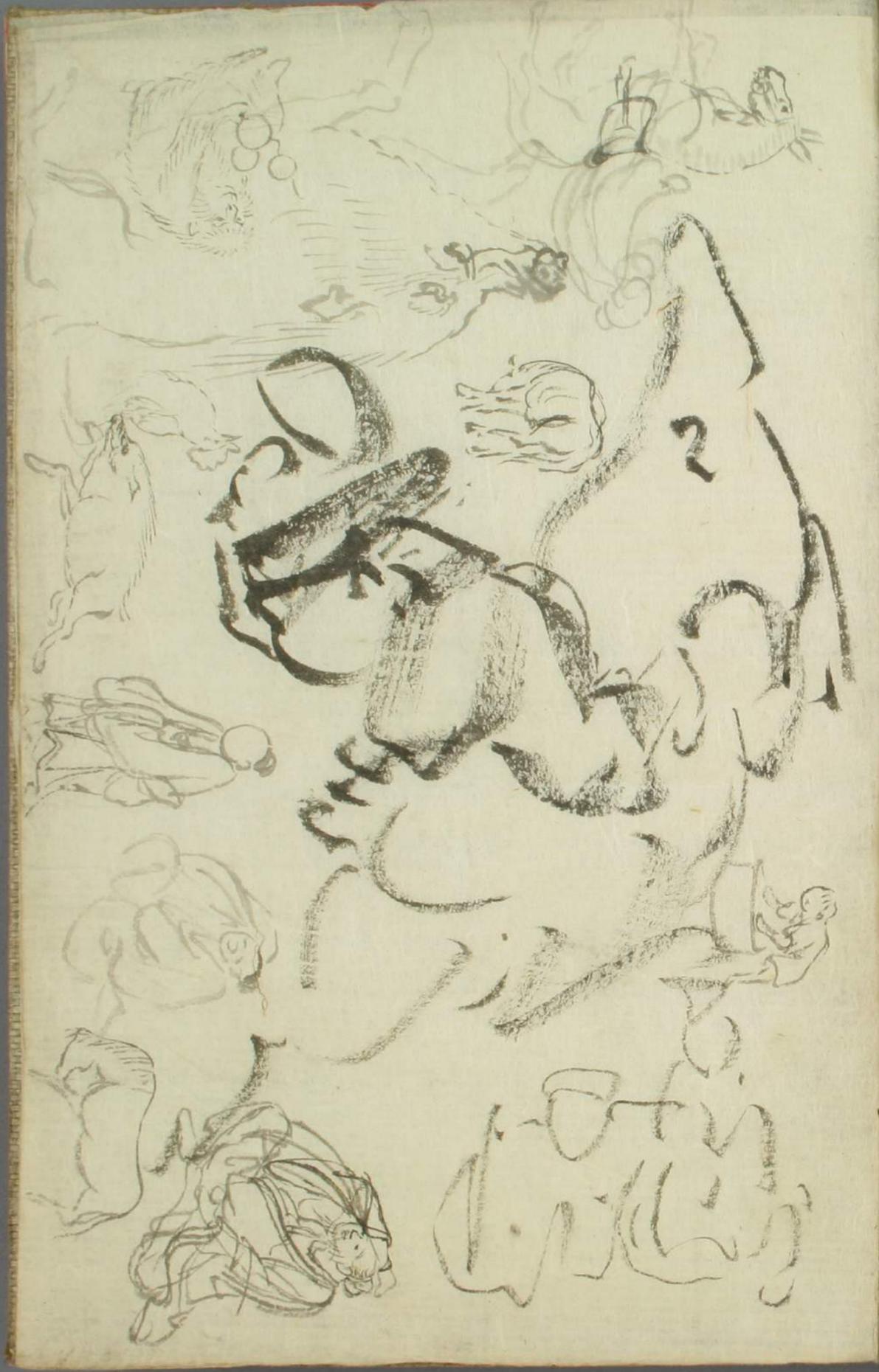
やもさうらぬ

浪乃

うか

云の公議たるれて
と出づるはささ
とささぬ破乃を
屋よささ杯一
やもさうらぬ浪のさ
さささささささ
千載茶のまのまかり
所十一それ中乃一也





ク
フ
マ
合
ス

2



